

られて極寒の冬も四十七度を数え、夕日を背に東へ飛び去る雁の群れに幾度涙したことか。この無念さを、もう一度、聞いてほしい。昭和二十年の終戦の秋、帰国を信じる我々を虫けらの如く祖国とは逆の西へ北へこのシベリア鉄道で連れ去り、どこか知らぬがこの地の炭鉱で酷使した。暗黒の坑内に這いつくばって、痩せた身に鞭打つての作業は耐え難く、多くの友が犠牲になった。夜は俄かづくりの収容所のため極度の寒さで安らぎを得ることは出来なかった。食糧はなくマッチ箱のような小さな黒パン、時には他人のそれを奪い合うあさましき餓鬼の毎日だった。ただ一時疲れ切った身を草むらに横たえてあのヤゴタの実(コケモモ、ブルーベリーの一種)をたべた味は忘れられない。持ち帰り我が庭にさかせたい。

その年の暮れマイナス四十度もの猛烈な寒さが襲う。しかし着るものもない。その上不衛生なラーゲリ(収容所)にチフスが蔓延し皆が次々と倒れた。治療するすべもなく地獄の様だ。

遂に自分も高熱に冒されて頭が割れんばかりに痛みうなされる。瞼にわが妻子、親兄弟が浮かぶが手が届かない。やがて睡魔がおそい気が遠くなる。このまま死にたくないと呼ぶも声にならない。やがてあの極寒の空の下、凍土の上に捨て置かれる。満天の星空が輝いているが、わが服をもはぎ取られ体が凍つき動かない。そして雪が積もり、夏が来れば草が覆い、年を経るごとに空が見えなくなる。ああ俺は死んでいるのか。でも必ずや帰るぞ。日本は何をしてくれたのか。思えば祖国のためと駆り出され、この地獄のような地に送られたまま、何十年も放置されるとは許し難い。さらに旧ソ連のこの残酷な抑留の恨み、筆舌も及ばない。戦いが終わった後にここに連れ去り、劣悪な環境で酷使し、幾万もの同朋を死に至らしめるは、国際法からも、人道上からも許しがたき蛮行だ。またわが軍の上層部は満州に幾多の民衆を置き去りにし、先に国へ逃げ帰るとは許せない。これらの事実を決して忘れることなく、後世に伝えてほしい。

また今の日本は豊かで繁栄に酔いしれてると聞くが、時にはこの犠牲の苦しみを思い起こしてほしい。

いま目の上の草、土を取り除いてくれたのか、まぶしい青き空の下、見えるは愛しきわが妻子か、兄弟か』



シベリアの大地に眠る

スケッチ:松原 永吉

やがてその黒く光る骸の厳しい眼差しが微かに微笑みかけるかのように泪越しに霞んで見えた。『おう、お前たちか。よく来てくれた。これ以上言つまいい、一緒に連れ帰ってくれ。そして祖国の故郷でゆつくりと眠らせてくれ。』と語りかけた。

## 【終りに】

ここに斃れた千幾百の英霊のご冥福を祈り、後日必ず日本にお迎えできる事をお約束して、合掌した。その後遺骨の一部は収集され東京の千鳥ヶ淵戦没者墓苑に収められたとき。今年はその千鳥ヶ淵へ慰霊に行き、その後を報告をして来ようと思います。真の平和の尊さと命の大切さをもう一度見つめ直し二度と過ちを繰り返してはならない。

昨今の世の動き、特に政治、組織体制の暴走がありはしないか心配です。また我々には核兵器廃止はもちろん、原発も踏みとどまる勇気が必要な時と思われてならないのです。

## 現在の想い

松原 永吉さん

目まぐるしく変わる世の動き、目先の事象に翻弄され、自分たちのあり様を見失いかけている。そんな気がしてならないのです。

目には目をという争いのエスカレート、一触即発の戦争のリスクと背中合わせであることを考えねばならないと思います。ある物理学者が無限なるものは宇宙と人間の愚かさだという。核による人類滅亡を意味しているか？

戦争の悲劇は罪のない人々、とくに幼い子供たちにその犠牲を強いるのです。それが我々年老いた人間には最も許せない事なのです。この終戦七十年の節目に過去を振り返り明日を見つめることも大切です。特に先のある若い人たちをお願いしたいのです。

あの戦争はなぜ起きたのか、止められなかったのか、そしてあの悲劇、泥沼から這い上がったあの姿など後世の皆さんにもう一度お伝えするのが最後の務めだと思っています。